

563 CDDPを含む多剤併用化学療法時にみられる腎機能障害の臨床的検討 — I-131 OIH 及び I-123 OIH レノグラムを中心として —

白坂今日子、松井律夫、金川公夫、青木理、平田みどり、山崎克人、井上善夫、西山章次、河野通雄（神戸大 放）

我々はこれまで悪性腫瘍治療時に使用されるCDDPによって起こる腎機能障害の検出にI-131 OIH レノグラムを用い、その有用性を検討してきた。今回はさらにI-123 OIH 腎シンチグラフィによる評価も加えて計21例について、他の腎機能のパラメーターと比較検討した。

レノグラムにあらわれる腎機能障害は主にⅢ相の異常としてあらわれT2/3 が最も鋭敏にとらえていた。CDDP投与前にレノグラムに異常がみられる症例では他のパラメーター（主にCcr）に異常が検出されない場合にもCDDP投与後に腎機能障害が強くあらわれる例があり、投与に際して留意が必要である。

564 小児におけるI-123 HIPURANを用いた腎血流量測定について

田村郁夫（都立豊島病院）、杉山 卓、関 孝一、神谷勝己、岡本憲三、粟生田邦男、山田 修、新海龍二、小林 勝（都立清瀬小児病院放射線科）石田治雄（同外科）石井勝己（北里大学放射線科）

我々は以前よりI-131 HIPURANを用いて小児における腎機能検査を行ないこのデータ処理にて腎血流量を求めていたが、今回はI-123 HIPURANを用いて小児の腎機能検査を行う機会を得た。対象は3才から11才の10症例である。I-123 HIPURANはI-131 HIPURANと比較して大量投与ができ血流相イメージ、動態イメージを得る事ができた。また、腎血流量、分腎機能、 T_{max} 、 $T_{1/2}$ を算出しI-131 HIPURANで得たデータと比較検討をおこなったところ若干の相違が見られた。小児におけるI-123 HIPURANの有用性について報告する。

565 腎血管性高血圧症が疑われた症例に対するCaptopril負荷腎シンチグラフィの臨床知見

伊藤 和夫、塚本江利子、加藤千恵次、中駄 邦博、永尾 一彦、古館 正徳、北海道大学校医学科

Captoprilはアンジオテンシン転換酵素抑制作用を有し、Tc-99m-DTPAを用いた腎レノグラフィと併用することにより、精度の高い腎血管性高血圧症(RVH)の診断が得られている。RVHの疑われた症例に施行したCaptopril腎シンチグラフィ(CRS)を施行し、その診断基準に関して検討した。

Captopril25mgを検査1時間前に経口で服用させ、baseline study(SRS)と同様のTc-99m-DTPA腎シンチグラフィを施行し、レノグラムの作製およびGFRの算出を行った。

RVHではCaptoprilに対してGFRの低下が観察されたが、この反応はRVH以外の高血圧例でも観察された。また、RVH例でも無反応の症例があり、Captoprilに対する反応は腎動脈狭窄の程度により異なることが予想された。

566 移植腎に対するCaptopril 負荷レノグラム 林 郁子、水入苑生、伏見達夫、小原武博、長谷川昭、平田清文（東邦大学大森病院腎臓学研究室）、高野政明、中込俊雄（同中放RI）

腎移植患者の高血圧の原因となる移植腎動脈狭窄のスクリーニング検査として移植腎に対するCaptopril負荷レノグラムの有用性を検討するため、腎移植患者40人にCaptoprilを投与し、投与前後にTc-99m-DTPAとI-131-OIHを混注し、移植腎動態検査を行い、レノグラムを作成した。投与前後に血圧、PRA, Ald, Angiotensin(A)I, II, 腎機能を測定した。高血圧群は自己腎保有者が多く、PRA, AIの前値が高い者もいたが、レノグラムは明らかな変化を示さず、レノグラムの明らかな変化を認めたのは正常血圧の小児1例のみだった。又、血管造影で狭窄が認められたにも関わらず、Captopril 負荷後レノグラムの変化を認めなかった1例をも経験した。

567 Deconvolution Analysisによる老年者腎機能評価

吉越富久夫、町田豊平、大石幸彦、木戸 晃、鳥居伸一郎、浅野見司（慈大泌尿器科）、山田英夫、丹野宗彦、間島寧興、井手 宏、（都老人医療センター・核放）

レノグラム曲線をChevishevの近似方式による8~9次式、心血流減衰曲線は最小二乗法により近似し、deconvolution analysisにより伝達関数を求め、老年者60例についてMTT、 T_{80} 、 T_{20} および血中残留率15分値を算出した。 ^{131}I -Hippuran、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPAを使用した、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPAではinitial spikeによる影響を除外する近似も行なった。血清Cr値が正常範囲内で、正常型レノグラムを示し、MTT値が正常でも血中残留率15分値には幅があり、測定値の分析に際しては、血中残留率を参考にする必要があることが示唆された。本法は老年者腎機能の指標の一つとして利用可能と考えられる。

568 体外衝撃波尿路結石破碎装置による腎尿路結石破碎前後のレノグラムについて

三本重治、尾原石太郎（横浜市民病院放射線科）
安田三彌（横浜市民病院内科）
福島修司（横浜市民病院泌尿器科）

昨年7月体外衝撃波尿路結石破碎装置ESWL(Extracorporeal Shock Wave Lithotripsy)が設置され現在まで約300例に尿路結石の破碎を行ってきた。

今回は $^{99\text{m}}\text{Tc}$ DTPAにて破碎前後の腎スキャンレノグラムを施行し得た約40例について比較検討を行った結果について発表する。